親の養育態度と第二反抗期、自我同一性との関係について

高　秀　涼　佳・渡　邊　　晶・橋　詰　倫　典
古　田　貴　久

On the Relations Between Parental Binding, the Second Rebellious Stage, and Ego Identity

Suzuka TAKAHIDE, Akira WATANABE, Tomonori HASHIZUME
and Takahisa FURUTA

群馬大学共同教育学部紀要　芸術・技術・体育・生活科学編
第 57 巻　73―78 頁 2022 別刷

親の養育態度と第二反抗期、自我同一性との関係について

高　秀　涼　佳[1)]・渡　邊　　晶[2)]・橋　詰　倫　典[3)]
古　田　貴　久[4)]
1）前橋市立大胡東小学校
2）埼玉大学大学院教育学研究科
3）伊勢崎市立第一中学校
4）群馬大学共同教育学部
（2021 年 9 月 29 日受理）

On the Relations Between Parental Binding, the Second Rebellious Stage, and Ego Identity

Suzuka TAKAHIDE[1)], Akira WATANABE [2)], Tomonori HASHIZUME[3)] and Takahisa FURUTA[4)]
1）Ogo-Higashi Elementary School, Maebashi
2）Graduate School of Education, Saitama University
3）Daiichi Junior High-School, Isesaki
4）Cooperative Faculty of Education, Gunma University
（Accepted on September 29th, 2021）

１．はじめに

人間はその成長の中で二度の反抗期があるとされている（白井，1997）。第一反抗期は幼児期に訪れる通称「イヤイヤ期」であり、第二反抗期は「親に依存していた子どもが親から自立する過渡期」（深谷 2004）であり、思春期に多くの人が通る道として知られている。ここでいう自立とは、親の助けを借りなくても生きていけるというような経済的な自立のことではなく、親と自分は違う人間である自覚をもち、自分の意思をもって生きていくことができるという精神的自立のことである。

山口（1991）は、第二反抗期を「自我が急速に成長し、独立した一個の人格が確立されようとする時期であり、精神面での独立・自立欲求が高まってくる」、自我同一性を確立する時期と定義した（江上，田中，2013）。また、乾（1977）は第二反抗期は「生物学的必然ではないけれども、やはり何らかの意味で通過しなければならない正常な発達のひとつの節である」と述べている（白井，1997）。

しかし、近年第二反抗期を経験していない人が一定数いることが報告されている。深谷（2005）は、中学生を対象に行った調査の結果から「総じて親子関係がうまくいっている中学生が多い」とし、「第二次反抗期的な険悪な親子関係ではなく、仲のよい親子の姿がみえてくる」としている。

もし第二反抗期が「通過しなければならない正常な発達」なのであれば、第二反抗期を経験していな

い人は正常に発達できていないことになる。彼らは、自我同一性に問題を抱えているのだろうか。また、第二反抗期の有無は親子関係で判断されているが、子どもが第二反抗期を経験するかどうかは、親の養育態度が影響しているのではないだろうか。

反抗期は「親に依存していた子どもが親から自立する過渡期」（深谷, 2004）と言われている。したがって、親が子どもに手をかけすぎている、子どもの行動を制限しすぎているような家庭で育った場合に反抗期を通るのではないかと考えられる。反対に、子どもの意思を尊重した、過保護でない家庭で育った場合には、わざわざ親から自立する必要がないため、反抗期を経験することなく成長するのではないだろうか。

反抗期を経ることは自我同一性の獲得や形成に2つの意味でプラスの影響を及ぼすと予想される。すなわち、反抗期を通じて子どもは親から自立するといわれるが、親と自分の離別という意味では、自我同一性の下位概念でいう「対自的同一性」が特に高まると考えられる。同時に、親に反抗し、その後円満な関係に戻れた時には、親から本当の自分を見てもらえるようになることから「対他的同一性」にも影響していると考えられる。

以上をまとめると、親の養育態度が、反抗期のあり方に影響しつつ、子どもの（対自的・対他的）自我同一性の形成に影響すると考えられる（図1）。本研究の目的はこのモデルの検証である。

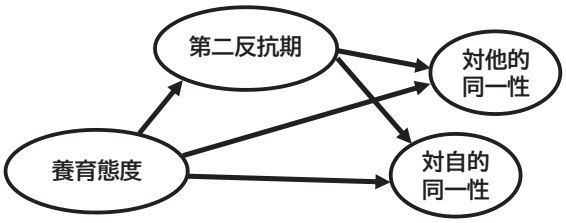

図1　本研究における親の養育態度、反抗期、および自我同一性の因果モデル

反抗期と発達に関しての研究はこれまでも多く行われてきた（白井，1997，2015；深谷，2004）。しかしながら、それらの研究では、反抗期の有無そのものを本人に問う形で調査が行われていた。しかしそれでは本人の自覚に結果が左右されてしまったり、「反抗期」の解釈の違いが結果に影響したりするのではないだろうか。

そこで本研究では回答者間の差を埋めるため、反抗期について、反抗期の有無そのものを問うのではなく、具体的な反抗行動や反抗感情を問う質問紙調査を行った。そして、「親の養育態度」と「自我同一性」について合わせて尋ねて、これらの要因間の因果的関連性をパス解析で検討した。

2．方　法

質問紙

「養育態度」「第二反抗期」「自我同一性」の3要因について、それぞれ先行研究が作成した以下の尺度を、予備調査の結果をもとに語句に若干の改変を施して用いた（「（親は）私には、気持ちの上で冷たかった」→「私に対して冷たいように思えた」など）。回答者（詳細は後述）にはGoogleフォームを用いて、すべての項目に対して、「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」までの6件法で答えてもらった。各要因について述べる。

養育態度：Parental Bonding Instrument（PBI）（Parker, Tupling, Brown, 1979）

子どもの頃の親の養育態度を想起して回答する、25項目からなる尺度である。井上，大井，西村，井森，斉藤（2006）で引用された藤井（1994）の日本語訳を用いた。

第二反抗期：反抗感情・反抗行動尺度（須崎，2008）

反抗期の頃の親への反抗感情・反抗行動を想起して回答する。野村（2014）で引用された、25項目からなる尺度である。

自我同一性：多次元自我同一性尺度（MEIS）（谷, 2001）

24項目からなり、現在の自分について回答するものである。

回答者

18 歳から 25 歳の男女 155 人（男性 64 人、女性 91 人、年齢の最頻値は 22 歳）。回答者は筆者の知人らを通じて、ソーシャルネットワークサービスの LINE によって集めた。回答者は群馬大学の学生に限らず他大学の学生や卒業生を含む。調査は 2020 年 10 月に実施した。

3．結　果

各項目の回答について、「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」を 1 点から 6 点として得点化した。すべての項目で、最大値は 6、最小値は 1 となり、最大値・最小値の幅については不良項目はなかった。紙面の都合で、質問項目と因子負荷量は「養育態度」だけ示す。また、本研究では統計処理は R を用いた。

3. 1.「養育態度」について

25 項目中 14 項目で、平均値±標準偏差が尺度の最大値または最小値を超えており、天井効果・床効果が疑われたため除外し、11 項目とした。これらに対して最尤法・プロマックス回転で因子分析を行った。因子負荷量 |0.40| を基準とし、後続の因子との固有値の落差をもとにして、3 因子を抽出した（表 1）。それぞれの因子の項目は本尺度を用いた先行研究（井上ら, 2006）の因子と似通っていたため、因子名を付ける際に参考にした。

因子Ⅰに対して、「よく微笑みかけてくれた」、「私と話すのを楽しみにしていた」、「落ち込んだ時、私に寄り添ってくれた」、「私の抱える問題や悩みをよく理解してくれていた」の各項目がプラスの負荷を示していた。以上から因子Ⅰは「情愛」と命名した。

因子Ⅱに対しては、「私が望むだけ自由にさせてくれた」、「望むだけ外出させてくれた」、「私の好きな格好をさせてくれた」、「自分のことは自分で決めさせてくれた」がプラスの負荷を示していた。以上から因子Ⅱは「決定尊重」と命名した。

因子Ⅲに対しては、「私を子ども扱いしがちだった」、「過保護だった」、「私の行動を常に把握しようとしていた」がプラスの負荷を示していた。以上から、「依存期待」と命名した。

3. 2 「反抗感情・反抗行動尺度」について

質問項目ごとの平均値と標準偏差から、天井効果・床効果が疑われた 5 項目を除外して 19 項目を分析した。クロンバックの α 係数は、反抗感情因子（12 項目）が .73、反抗行動因子（7 項目）が .75、

表 1　「養育態度」の因子パターン（α=.73）

	Ⅰ：情愛 α=.85	Ⅱ：決定尊重 α=.83	Ⅲ：依存期待 α=.75
よく微笑みかけてくれた	0.979	−0.174	−0.068
私と話すのを楽しみにしていた	0.836	−0.043	0.128
落ち込んだ時、私に寄り添ってくれた	0.674	0.124	0.019
私の抱える問題や悩みをよく理解してくれていた	0.533	0.212	−0.004
私が望むだけ自由にさせてくれた	−0.078	1.001	0.103
望むだけ外出させてくれた	−0.140	0.733	−0.136
私の好きな格好をさせてくれた	−0.010	0.644	0.069
自分のことは自分で決めさせてくれた	0.243	0.411	−0.366
私を子ども扱いしがちだった	−0.063	0.244	0.821
過保護だった	0.146	−0.081	0.704
私の行動を常に把握しようとしていた	−0.025	−0.098	0.639
因子間相関係数	Ⅰ：情愛	Ⅱ：決定尊重	Ⅲ：依存期待
Ⅰ：情愛	1	0.549	−0.558
Ⅱ：決定尊重	0.549	1	−0.124
Ⅲ：依存期待	−0.558	−0.124	1

全項目で .93 であった。

3.3 「多次元自我同一性」尺度の結果

床効果が疑われた項目を除外した 22 項目で分析を進めた。最尤法・プロマックス回転で因子分析を実施し、因子負荷量の基準を |0.40| として 4 因子解を抽出した。質問紙の作成で参考にした谷（2001）も 4 因子での分析を行っていることからも因子数は妥当だといえる。

因子の解釈では、4 因子とも先行研究（谷, 2001）の因子と内容が似通っていたため、因子名を付ける際に参考にした。

因子Ⅰ（α=.84）に対して、「過去に自分を置き去りにしてきたように感じる」、「今の自分は自分らしくないと感じる」、「いつの間にか自分が自分でなくなってしまったような気がする」、「過去の自分の方が自然体でいられたと感じる」、「今のままでは次第に自分を失っていってしまうような気がする」、「自分がないと感じることがある」の各項目がプラスの負荷を示していたため、「自己斉一・連続性」と命名した。

因子Ⅱ（α=.85）に対しては、「自分の未来のためにするべきことがはっきりしている」、「自分がどうなりたいかはっきりしている」、「自分が将来どうしたいのかよくわからない時がある」、「自分の将来像がない」がプラスの負荷を示していたため、「対自的同一性」と命名した。

因子Ⅲ（α=.80）に対しては、「本当の自分は人に理解されないだろうと感じる」、「自分らしく生きていくことは. 現実の社会では難しいだろうと思う」、「自分の周りの人は本当の私をわかっていないと思う」、「人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる」、「自分は周囲の人によく理解されていると感じる」がプラスの負荷を示していたため、「対他的同一性」と命名した。

因子Ⅳ（α=.81）に対しては、「社会の中で自分らしい生き方ができると思う」、「社会の中で自分らしい生活を送れる自信がある」、「社会の中で自分の

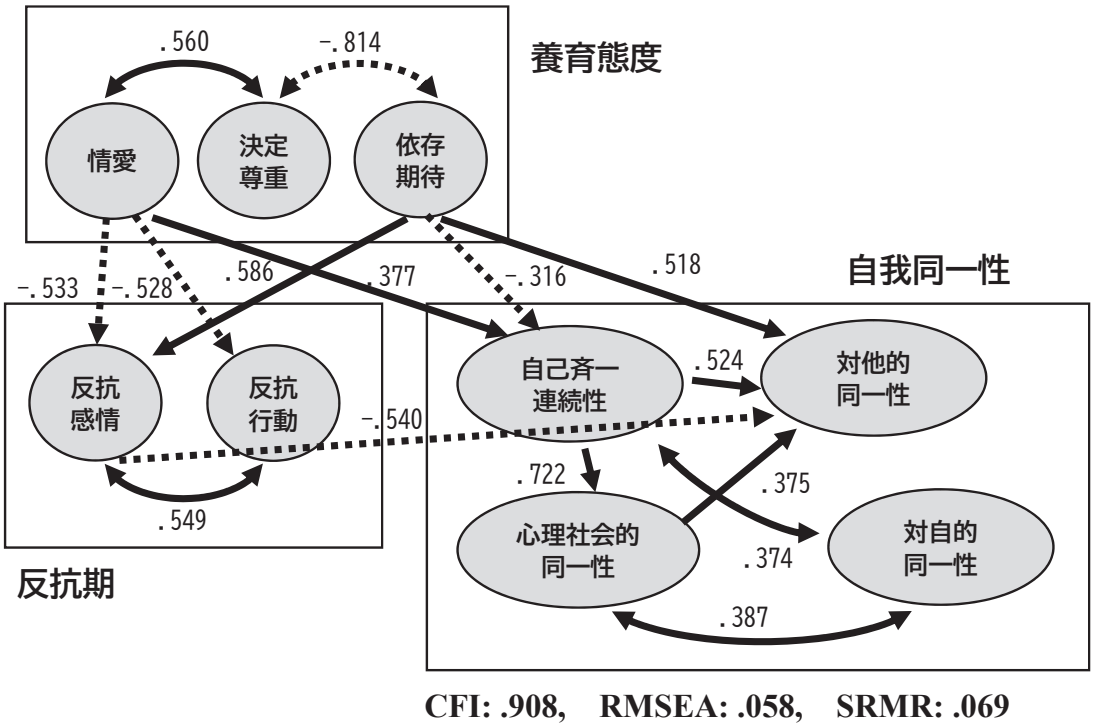

図 2　因子間因果モデルのパス解析の結果

力を十分に発揮できると思う」がプラスの負荷を示していたため「心理社会的同一性」と命名した。

3.4　第二反抗期モデルの妥当性の検証

「はじめに」で提示した第二反抗期のモデル（図 1）の妥当性を R のパス解析パッケージ lavaan で検討した。結果を図 2 に示す。CFI などモデルの適合度の各指標から、本モデルの妥当性が確認されたと言える（山田，村井，杉澤，2015）。

4．考　察

4.1　親の養育態度と第二反抗期の関係について

パス解析（図 2）により、養育態度の「情愛」が「反抗感情」「反抗行動」にマイナスで影響を与えており、「依存期待」が「反抗感情」にプラスで影響を与えていることが分かった。このことから、親が子どもによく微笑みかけたり、子どもと話すことを楽しみにしていたりと、情愛的な養育態度で子どもに接すると、子どもの親に対する反抗的な感情や行動が起こりにくくなり、反対に親が子どもの行動を把握したがったり、過保護であったりすると、子どもの親に対する反抗的な感情が高まるということを読み取ることができる。

以上の結果は、親の養育態度が子どもの反抗感情・反抗行動に影響を与えていることを示唆している。反抗期を経験していない人が多い（深谷，2005）のは、親が情愛的な養育態度をとる家庭が多いということ、もしくは親が子どもを子ども扱いする家庭が少ないためであろう。

パス解析からは、反抗感情・反抗行動と自我同一性の関係はほとんど見られなかった。「反抗感情」から「対他的同一性」にマイナスの矢印が伸びているが、それ以外の反抗期の下位因子から自我同一性への関係が見られなかった。

これまでの反抗期をテーマにした研究では、反抗期は自立・自我の成長のために必要なものだとされてきた（乾，1977；山口，1991）。しかし今回の調査では、反抗感情・反抗行動の高まりは自我同一性の獲得につながるものではないということを示唆している。

この理由として、現在と当時とでは反抗期の持つ意味が変化してきている可能性が考えられる。明治時代に制定された戸主が家族を統率する「家制度」、高度成長期からバブル好景気の 1980 年代に社会問題となった「児童生徒の非行」や「校内暴力」、昭和 30 年代初期から指摘された過剰に教育に力を注ぐ「教育ママ」など、ここ 80 年程で、日本の子どもを取りまく環境はかなり激しく変化しているといえる。そのなかで、反抗期の持つ意味が変わってくることは当然であるといえるのではないだろうか。かつては親が絶対であるがために反抗して自立する必要があったが、今では親に対等に扱われている子どもも増えており、親に反抗する必要がなくなってきているのではないかと考えられる。同時に、親に対する反抗は見られなくなってきたが、親以外への反抗は存在する可能性はある。

4.2　養育態度と自我同一性の関係について

パス解析より、主に養育態度と自我同一性との間に関係があることがわかった。また、自我同一性のなかでも自己斉一性・連続性が中心になっていることが推定される。

養育態度の「情愛」が「自己斉一・連続性」にプラスの影響を与えており、反対に「依存期待」はマイナスの影響を与えていた。親に話を聞いてもらえたり、落ち込んだ時寄り添ってもらえたりすることで、自分を否定されることなく、自分らしくあることができたのだと考えられる。一方、親から依存されて育った場合は、「自分」の中に「親」が入る（自分の本当にやりたいことや希望のほかに、親の要望や期待が自分を大きく占める）ことで、自分と親の境目が薄くなり、自分らしさとはなんなのかわからず、自己斉一性・連続性を獲得することが困難になってしまった可能性がある。

パス解析の結果から、自我同一性の下位概念のうち「自己斉一性・連続性」から他の 3 つの下位概念へ矢印が伸びていることがわかる。谷（2001）では、自我同一性の感覚において自己斉一・連続性がまず重要である、とされている。自己斉一・連続性を獲

得することが自我同一性の獲得に最も重要であるなら、情愛的な養育態度は、自我同一性の獲得に大きく影響しているといえるだろう。

他方で「依存期待」は「対他的同一性」にはプラスの影響を与えている。「依存期待」の質問項目を見ると、「過保護だった」「私を子ども扱いしがちだった」「私の行動を常に把握しようとしていた」などがある。これらのことから、「依存期待」の高い、親から過剰に気にされた子どもには、「親は私のことをよくわかっている」という感覚が備わっているのではないだろうか。その感覚が「対他的同一性」の高まりにも影響しているのではないかと考えられる。

5．結　論

養育態度と自我同一性との関係が明らかになったことで、これまでしばしばいわれてきた「反抗期を経ることが自我同一性の獲得に欠かせない」という主張とは異なり、親への反抗期を経験せずとも自我同一性が獲得されうるということが分かった。これまでは反抗期を経て獲得するものとされていた自我同一性も、現在は情愛的な養育態度によって獲得することができる。社会や家庭環境の変化によって、反抗期の意味が変わってきているのではないかと考えられる。

文献

江上園子・田中優子（2013）第二反抗期に対する認識と自我同一性との関連．愛媛大学教育学部紀要，**60**：17–24.

Erikson E.H. (1959) Identity and the Life Cycle. Norton & Company: New York.（小此木啓吾（訳編）（1973）自我同一性．誠信書房）

藤井まな（1994）Parental bond に関する基礎的研究―育児ストレスとの関連性―．関西学院大学教育学科研究年報，**20**：89–103.

深谷昌志（2004）中学生にとっての家族～依存と自立の間で～．モノグラフ・中学生の世界，**77**：1–15.

深谷野亜（2005）家族. モノグラフ・中学生の世界, **特別号**：55–62.

井上俊哉・大井京子・西村純一・井森澄江・斉藤こずゑ（2006）親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅱ―PBI と IPA の尺度の再検討―．東京家政大学研究紀要，**46**：245–251.

乾孝（1977）新版 児童心理学．新評論

小杉考司・清水裕士（編著）（2014）M-plus と R による構造方程式モデリング入門．北大路書房

野村有輝（2014）親子の情緒的関係性と実際の交流からみた反抗期についての一考察. 神戸大学発達・臨床心理学研究，**13**：32–37.

Parker, G., Tupling, H., & Brown, L.B. (1979) A parental bonding instrument. British Journal of Medical Psychology, **52**: 1–10.

白井利明（1997）青年心理学の観点からみた「第二反抗期」．心理科学，**19**(1)：9–24.

白井利明（2015）青年期のコンフリクトを親子はどのように体験するか：―前方視的再構成法を使って―．青年心理学研究，**27**(1)：5–22.

須崎暁世（2015）青年期における親子間葛藤に関する研究の再検討―世代性の視点と社会・文化的視点の必要性―．神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，**8**(2)：57–66.

須崎暁也（2008）現代の青年における第二反抗期．神戸大学発達科学部人間形成学科卒業論文（未公刊）

谷冬彦（2001）青年期における同一性の感覚の構造―多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成―．教育心理学研究，**49**：265–273.

山田剛史・村井潤一郎・杉澤武俊（2015）R による心理データ解析．ナカニシヤ出版

山口雅史（1991）反抗期．山本多喜司（監修）発達心理学用語辞典．北大路書房，p.259.